

「大坂の史跡を訪ねて」

連載45回目

おさたに よしはる
長谷 吉治

岩崎彌太郎ゆかりの地

岩崎彌太郎旧居跡(土佐藩蔵屋敷跡)

西区北堀江 4-9

三菱の創業者である岩崎彌太郎は、土佐藩が運営する「長崎土佐商会」の主任として任命され、長崎へ着任したのが慶応3年(1867)3月13日でした。

正式には「土佐藩開成館貨殖局長崎出張所」と称し、土佐藩の御手先商法を行う機関でした(同年2月開設)。開成館奉行は土佐藩参政の後藤象二郎でした。

彌太郎は商事貿易活動に従事し、維新时期では藩の武器・軍需品の購入などに奔走しました。藩の土佐商会とは別組織だったのが、坂本龍馬率いる「土佐海援隊」です。

4月から6月にかけて彌太郎と龍馬は、長崎で何度か面談していることが記録されています。彌太郎が記した「瓊浦日記其一」をご紹介します。

(慶應三年六月)三日

天気快晴、朝入商會談公事(朝、長崎商会に行き仕事の打ち合わせを行う)、回寓(彌太郎の寓居に帰る)、到後藤氏談公事(後藤象二郎の寓居に行き打ち合わせを行う)、午後坂本良馬來置酒(午後になり坂本龍馬が來訪し酒を置く)、従容談心事(じっくりと心を割って談じ)、兼而余素心ノ所在ヲ談候處(前々からの考えている本心を談じたところ)、坂本抵掌稱善(龍馬は手を叩いて「善し!」と称えた)、(以下省略)

(慶應三年六月)九日

雨、(途中省略)

午後水蓮船ニ乗ル(後藤象二郎と坂本龍馬は藩船「夕顔」に乗る)、商會高橋随行(土佐商会より高橋某が随行)、忽々旅装着ス(たちまち旅装する)、狼狽可知、二字比出帆ナリ(午後2時に出帆)、余及一同送之(余(岩崎)および関係者一同)、余不覺流涕數行(余(岩崎)は不覺にも涙を流す)、(以下省略)

※この船の中にて「船中八策」を龍馬は起草する。

岩崎彌太郎は、土佐藩開成館大阪出張所(土佐藩開成館貨殖局長崎出張所)の責任者として異動することになり、明治2年(1869)1月9日に長崎を発ち、同月12日、西長堀にある土佐藩大阪蔵屋敷に到着しました。この夜は近くの茶屋で宿泊したと日記に記しています。

明治政府が藩営事業を禁止しようとしている事を察知した土佐藩は、同年閏10月、土佐藩士とは別組織の民間商社として「九十九商会」を設立し、翌年に開業しました。彌太郎は藩の立場で事業の指揮を執りました。

明治3年(1870)、岩崎彌太郎は土佐藩の少参事(中老格)に昇格します。その後、土佐稻荷神社の西側にある敷地に住居を構えました。

廃藩置県後、土佐商会の事業を九十九商会へ継承し、「三川商会」「三菱商会」と名称が変更し、岩崎彌太郎が社主となりました。

明治7年(1874)、本社を東京に移転し、本宅も東京へ転居しました。

土佐藩蔵屋敷の跡地は大阪市などに分譲され、土佐稻荷神社だけは、三菱が継続して管理することになり現在に至ります。

同神社境内に「岩崎舊邸跡」の石碑と説明板があります。

その他、彌太郎の弟 岩崎彌之助寄進の青銅狛犬、彌太郎の長女 春路の婿である元内閣総理大臣加藤高明寄進の常夜燈などがあります。



明治2年(1869)2月13日、住吉卯日例祭のため同地を訪れた岩崎彌太郎は、坂本龍馬も宿泊したことがある「三文字屋」で夕食をしたことが日記に記されています。

彌太郎の長女 春路の夫は加藤高明(首相)、四女雅子の夫は幣原喜重郎(首相)。

彌太郎の弟 彌之助(三菱の2代目社長)の妻 早苗は、後藤象二郎の長女にあたります。福澤諭吉と連携し慶應義塾卒業をした優秀な人材を三菱に採用をしました。

現在も「三菱」は誰もが知るブランドとなっています。

勝 海舟の父 勝 小吉の来坂

幕末維新时期に活躍した幕臣 勝 海舟の父、勝 ^{こきち}小吉が来坂した時の史跡を紹介します。

勝 小吉は「不良旗本」といわれ自由奔放に生きながら、度肝を抜くような交渉上手で胆力が備わった魅力ある人物です。

男谷平蔵の子として生まれ、7歳のとき勝家の養子となりました。

勝家の祖 勝 季時は、近江の国坂田郡(滋賀県長浜市)に住み、2代目以降、今川家を経て徳川家康に仕えました。勝 小吉は勝家10代目になります。

自身は貧困でありながら、人の世話をよくしました。勝 小吉著による「夢酔独言」に「御願塚村での金談」があります。そこでは、天保9年(1838)当時、勝 小吉居住の地主

岡野孫一郎(1500石の旗本)を援けるため上坂したことが記されています。

岡野孫一郎は、かなりの道楽者だったようで、もめごとや借金をかかえていました。

小吉は岡野家から援助の依頼を受け、幾度となく奔走しました。

それでも道楽が直らず、岡野家の借金が5000両に跳ね上がり、岡野家断絶の危機となったため、勝 小吉は金の調達のため、岡野家の所領のうちのひとつである、摂津の御願塚村(ごがつかむら)へ向かいました。(天保9年(1838)11月9日)

<御願塚村での金談>

八軒家の船宿で2~3日逗留後、御願塚村に到着。御願塚村は現在の伊丹市御願塚付近にあたります。代官の山田新右衛門の邸に逗留し、事情説明のうえ村へ金の支援を講じます。しかし、金策ははかどらず小吉は当惑してしまいます。(天保7年には凶作飢饉があり、同8年2月に大塩平八郎の乱があったのでやむをえない事情もあったようです。)しかし、情報を収集すると「金を出さずに、退屈させて追い返す」という手段をとっていることを知った小吉は、一層諦めずに本腰を入れて粘りの行動に出ます。小吉は、御願塚村を起点にあちこちと出かけます。出かけますが村には間者を残し、村の状況を探らせています。大坂西町奉行 堀伊賀守利堅の用心を務め、知人でもある下山弥右衛門に会うため、大坂西町奉行所を訪ね、「夢酔(勝 小吉)様とお奉行様は懇意の仲」と知らしめたり、能勢妙見山詣で雨を降らせて驚かせたりしました。

最終的に「百姓相手の大芝居」を行います。1ヶ月間の滞在中で、百姓の非協力的であったことを責め、自身は代官の山田邸にて切腹することを公言します。慌てた百姓らは、翌日550両を差出し、残りの50両は近日中に江戸へ送ることを約束し、小吉は命がけの任務を果たしました。

勝 小吉訪問の地

御願塚村 代官 岡野新右衛門邸跡

兵庫県伊丹市御願塚

御願塚村の代官 山田新右衛門邸跡の推定地を写真でご紹介します。



勝 小吉逗留の地 山田新右衛門邸跡推定地